

きょうと福祉倶楽部だより 2020年 9号

家で看取ることの意味 - 家族にとっての在宅医療を考える

フリージャーナリスト藤井満さんの在宅でパートナーを見送った体験記の二回目です。

インターネットにはパートナーと藤井満さんの作ったホームページが残されていますのでご紹介します。

「週間レイザル新聞」 <http://reizaru.r-lab.info/>

■がんの妻を看取る 病院か在宅か②

2018年9月半ば、「これ以上の治療はできません」と、がんセンターを追い出されることになりました。ショックだったけれど、病院での見送るのは避けたかったから、後から振り返るとそれでよかったと思います。

退院後の選択肢はホスピスか在宅か、療養型の病院です。

療養型の病院は「生活の場」とはほど遠いので論外でした。

自宅近くの公立病院には評判のよいホスピス病棟がありました。

1泊2万円ほどです。ただ、ホスピスに入る場合は抗がん剤などの治療をやめなければならない。当時の妻は分子標的薬によってがんの進行をなんとかおさえている状況でした。薬をやめたら一気にがんが広がるのは目に見えています。

また10年ほど前ホスピスに入院した友人を見舞った際、設備は充実しているのに生活感がなくて寒々としていたのを思い出しました。生活感の大切さと薬の服用を考えると在宅緩和ケアしかない、と私は思いました。

「きょうと福祉倶楽部」の有田さんに勧められて在宅緩和ケアを実践する医師小笠原文雄さんの「なんとめでたいご臨終」(小学館)を読むと、多くの末期のがん患者が在宅で暮らしていることがわかりました。

在宅緩和ケアを実践する兵庫県の医師を20年ほど前に取材をしたことも思い出しました。

ただ、風呂やトイレに自力では行けず、がんセンターでさえも苦痛が取れないのに大丈夫なのか？

兵庫県の医師と小笠原医師のクリニックに相談の

メールを送ると、「在宅緩和ケアホスピスこそ望ましい」

「苦痛は取れます」と断言し、訪問診療専門の

「大阪北ホームケアクリニック」を紹介してくれました。

クリニックの名前をがんセンターの医師に言うと

「入院できる施設をもっていないから、いざという時にご自宅で看取ることになりますよ」と言われましたが、病院では死なせたくないから望むところです。

「家に帰るからな」と妻に告げると「もう料理なんかしたくない」。

「オレがつくるわ」と言うと、「そんなん地獄や」

「そりゃないやろ」と言うといたずらっ子のように笑います。

「ヘルパーさんの料理ならええか？」と言うとコックリとうなずきました。

9月18日の退院の日、エレベーター前に看護師さん10人ほどが見送りになり、「旦那さんも気をつけてくださいね」と声をかけられ、危うく涙があふれそうになりました。

民間救急(2万8千円)でマンション5階の自宅に着くと、訪問入浴と酸素発生装置の業者、看護師、ケアマネジャー……と十数人が立てつづけに訪れます。混乱した妻は「私は見世物やない! 吉本かぁ」と叫びました。

夕方、友人が来てくれて妻の横で焼酎を飲みました。コーヒーや料理のにおいがただよふ家でにぎやかにすごせば、奇跡が起きるかもしれない、と、ちょっとだけ明るい気分になりました。

ヘルパーは午前と夕方の2回、訪問看護師が1回来てくれます。

訪問看護師は「夜、うんちで汚してしまったら、

旦那さん一人じゃ大変なので私たちを呼んでください」。

ベッド上で紙オムツを頭の下に敷いて、ペットボトルの湯で洗髪もしてくれます。

病院の緩和ケア専門の看護師もやさしかったけれど、

家での生活を支えるという発想はありません。それに比べて訪問看護師は、明るくて、てきぱきと作業をして、生活の不安をひとつひとつ解消してくれました。

(つづく)